

---

月 刊

---

# MéLange

---

Vol.126

---



---

2017.09.24

詩と評論・寺岡良信忌 〈トゥオネラ忌〉

・喜山荘一 〈島尾敏雄と「琉球弧」〉

---

月刊「Mélange」

Vol.126 2017.09.24

「月刊めらんじゅ」編集部

詩

- 壁/月光を浴び/虹/レクイエム ……………北岡武司 08
- 突風……………黒田ナオ 10
- 段ボール工場/解雇 ……………中嶋康雄 11
- 湖水の村 ……………福田知子 12
- よこぼう ……………大橋愛由等 13
- 場所 ……………有時秀記 14

トゥオネラ忌 (寺岡良信氏を偲ぶ)

トゥオネラ忌について…………… 04

寺岡良信氏の作品を読む (北村虻叟、野口裕、有時秀記、高木富子、福田知子) …………… 05

評論

島尾敏雄と「琉球弧」……………喜山荘一 16

お知らせ

神戸から 島尾敏雄を問う (10月21日神戸文学館) …………… 03

連載/詩評・エッセイ

神戸詞あしび 115 「事事無礙の世界観と幾多郎と大拙の相即」……………大橋愛由等 28

編集部日より★45/優待年齢になったことから、去年あたりから盛んに映画を観るようになった。鑑賞する映画は、神戸・大阪にあるミニシアターで上映されている作品から選ぶことがもっぱらである。全国紙の金曜日夕刊には映画の紹介記事が掲載されていて、そうした記事を参考にすることも多々ある。こんな傾向だから私の観る映画は観客数が多い「月刊ベスト10」に入るような作品とは無縁である。売れ筋の作品を避けている傾向もある。選択する映画もちょっとした偏見があって、アメリカ映画は避けるようにしている。たいした理由はない。大学生時代に打ち立てた誓いのようなもので、下宿近くにはイタリア映画やフランス映画を上映する会館があったり、インド映画などアジア映画がさかんに紹介されはじめた時代だったからアメリカ映画を排除してもなんら問題はなかった (でも時々ニューヨーク派と呼ばれる監督の作品は観ていた)。反対にスペイン映画ならなんでも観るようにしている (かの国にも「ゴヤ賞」という映画のアカデミー賞があり、レベルが高い作品が多いがハズレの作品もある)。映画は120分程度だから、黙って座っているだけで、短編小説を一篇味わったような気分になって快樂なのである。

島尾敏雄 生誕百年

二〇一七年一〇月二一日 (土)

午後2時〜3時30分

〈語るひとたち〉①司会・企画/大橋愛由等 (おおはし・あゆひと) 図書出版まろうど社代表、詩と俳句を書く。著作に詩集『明るい迷宮』、句集『群赤の街』ほか。

②語り手/高木敏克 (たかぎ・としかつ) 小説家。第4回 神戸文学賞授賞。2016年度 神戸新聞文芸最優秀 授賞。文学同人誌「漿」主宰 (現在休刊中) 著作に『暗箱の中のなめらかな回転』、『白い迷路から』ほか。「月刊神戸っ子」などの雑誌に執筆。芦屋大学講師、保険コンサルタント

③語り手/喜山荘一 (きやま・そういち) 奄美群島・与論島生まれ。マーケター。企業の商品開発や販売促進を支援。著書に、『珊瑚礁の思考』『奄美自立論』『聞く技術』『10年商品をつくるBMR』他がある。

2017年、生誕百年を迎える作家・島尾敏雄 (1917-1986) に関するリレートークを催します。島尾は生涯いくつかの場所に住みましたが、実家は神戸にあり、神戸と縁が深い作家です。また今年は映画「海辺の生と死」が上映され、ミホ夫人との戦争中の出会いと愛が表現されています。リレートークでは「神戸の作家」としての小説家島尾の評価と、ミホ夫人の故郷であり島尾が深くかかわった奄美にとって島尾はどんな存在であるのかを多角的に問い直す語りを予定しています。神戸と奄美にとって、島尾敏雄とはどんな表現者であったのかとの問いかけであり、島尾が築いてきた仕事についての〈顕彰〉から〈検証〉へまなざしを変えてゆくキッカケになればと想っています。

島尾敏雄を奄美から問う

文学・思想そして奄美の位相から

リレートーク at 神戸文学館

顕彰から検証へ

神戸文学館

〒657-0838

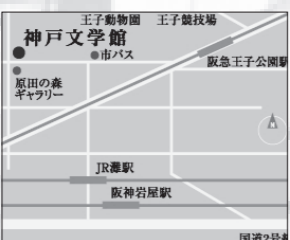
神戸市灘区王子町3丁目1番2号

電話・FAX 078-882-2028

JR神戸線 灘駅 北口から北西 約600m

阪急電車 王子公園駅 西口から西 約500m

阪神電車 岩屋駅から北西 約850m



問い合わせ先/大橋愛由等  
 図書出版まろうど社  
 090-5069-1840

参加費/200円 (資料代)

われらが詩友・寺岡良信氏を偲ぶ「トウオネラ忌」を二〇一七年九月二四日(日)に開催します。この「トウオネラ」とは、寺岡氏の第一詩集『ヴォカリーズ』(図書出版まろうど社)のなかの「玩弄」という作品に登場します。トウオネラはフィンランドの言葉で、黄泉の国という意味です。フィンランドで生まれた叙事詩「カレワラ」をもとに同国の作曲家・シベリウスがつくった交響詩「レミンカ」イネン組曲の中で、トオルネラ川を白鳥が泳ぐモチーフをメロデーにしているのです。クラシック音楽に造詣が深かった寺岡氏が、このシベリウスの楽曲にイメージを膨らませてトオルネラの白鳥を登場させています。その静かな抒情的光景が寺岡氏の作品世界と共鳴するために、寺岡良信忌を「トウオネラ忌」と呼ぶようにしました。



「トウオネラの河水はあなたの詩のように、深く青く澄んでおりますか。あなたの白鳥は解き放たれて川面に舞い踊り、美の羽を少しずつに畳んで一期をやすらっています。わたしたちは結びの一行を空白に置いたまま、悠久の時と、あなたの終わらない詩にゆだねることにします。」 富哲世 (『Mélange』本誌 Vol.17)

トウオネラ河

寺岡良信

連弾の一人は黄泉の明かり曳き  
麻酔医のサテイーの笑みよエーゲ海  
縫合の痛みに触れて星の息  
洗骨や石器時代の朝焼けに  
夢冷えてトウオネラ河に橋はなし

『埠頭を歩く』

北村虹曳

港湾の倉庫の隅の割れ鏡 闇と光の破線を折りつ  
人気なき待合室の天井に思念も溶けて光がゆらぐ  
視野覆うにこりいよいよ増えきたり負ふことありし友逝くことに

## しのぶ

### ▼野口裕

黎明／寺岡良信

潮鳴りに拒まれた眠りは  
いつも波が綻びを洗った  
黎明の  
蒼い炎に灼かれた櫃から  
もうひとりの私が旅立つ

遙かに嘯く  
海の吐息と  
果樹わたる風を放棄した  
記憶の軋みに  
馭者座の鞭がひびく  
霧に拭はれた尾根づたひに  
谿へくだる径  
未環の物語を閉ぢるために  
季節の崖を逐はれる石工よ

春寒き  
その岩場から私は切り出されたのだと

先日から彼の第一詩集『ヴォカリーズ』を読み返していた。改めて、彼の息遣いの根源を知ると同時に、物足りなさも感じた。どこか一行から次の一行に移る間合いが外れているように感じた。当方の気のせいかもしれないが、ふと思いつき立ち死の間際に月刊メランジュに投稿した詩群を読み返してみた。そこに、彼の行から行に移る際の息継ぎの確かさがあつた。おそらく彼が詩語としてもっとも大切にしているものは、語と語、行と行に挟まってゆく沈黙のリフレインだろう。沈黙が繰り返されるたびに、詩の世界は深みを増す。冒頭に掲げた「黎明」は、一連の最終行「もうひとりの私が旅立つ」を他の行、他の連が取り巻いて、死への旅立ちを優しく彩っている。沈黙をともないながら。

二連の「果樹わたる風」は、彼の俳句の嗜好からすると、金子兜太の、

果樹園がシャツ一枚の俺の孤島  
を想起させる。若年時の兜太の向日性、逞しさを己のものとしてできないことを彼は自らのために恥じていたのだろう。「馭者座の鞭」は、それ故に悲痛に響き、三連の「未環の物語を閉じる」は遺書めく。

岩場から切り出された「私」は、再生であると同時に墓石である二重性を帯び、おそらく死後の世界を信じていなかった彼の、死後への思いをかき立てて止まなかったことだろう。

### ▼高木富子

流木／寺岡良信  
詩集『凱歌』より

流木はひたすら  
待ちつづけた  
海が船体を砕いたとき  
わたしが願ったものは  
遠い遙かな再会  
知らない国のうつくしい砂に  
わたしたちは  
傷ついた約束のやうに集って  
もういちど  
帆船を夢みようと

流木の願ひは  
とどかない

蒼ざめた言葉ばかり  
星雲の奈落に拾って  
不眠を飼ひつづける月日よ  
月光が潮騒と睦みあふ  
夜明けに  
溶け  
ながれ  
明日  
わたしの影はるない

希望は  
いつも  
寂寞のちに



ひらく  
黄泉にはばたく  
帆船の翼もまた

へ流木に寄せて

敬撃

言葉、単語の一つ一つにどのように反応するか、人それぞれ微妙に差異があるが、寺

岡氏の詩に幾たびもたち現れてくる言葉に不思議な安らぎを、美しさを、哀感を感じる。

「流木」に現れる言葉、「星雲、影、黄泉、帆船、翼」等、いずれも大切な意味深い言葉だ。

寺岡さんの世界では既に帆船は砕け、その残滓が流木となり漂っている。滅びを、既に感得し体験し見定めて沈みつっ・遠い遙かな知らない国のうつくしい砂に再会したい、元の姿を取り戻したいと、彼は願っていた。が、流木の願いは届くはずなく、また届かなくてもいい、彼はそこまで見通していたと思う。

切ない想い、それでも再会、再発見への願い、希望なくして人は生きられない。が、希望はいつも寂寞のちにひらくと。

そして今、彼の船は翼持ち、黄泉に。

わたしが書いた帆船は乾いていく大地に見捨てられ壊れつつある姿を晒し、尚旅したい

と呟き、夢見ている。書いた時点でわたしはまだ生きているという軸しか見定めていない……そして今でもわたしの思いは生と死両方に向かって無駄とも不可能とも言える切実の

中で引き裂かれ渦を巻いている。ただ足掻きに過ぎないのだろうと半ばの自覚もある。

船とは何だろう。舟という乗り物、そして人も乗り物にも譬えられる・一個の身体であるという空間的なもの。その航跡は一人の人間にとっての一

南の砂丘を懐かしんだ  
店晒しの陶器屋も

看板だけの理髪店も

夕昏れはいつそう

そぞろ寒くて虚ろだ

遠くで波が砕ける

所在ないねえ

と

陶器屋が端の歩を突く

理髪店も端の歩を突く

遠くで波が砕ける

陶器屋はちらと相手の顔を覗く

理髪店もちらと相手の顔を覗く

腹ん底に真つ赤な夕陽が溜つて

奴さん

目が潤んであはしまいかと

互ひに相手の顔を覗く

王様よ

迷い子よ

海は巨きな影法師

笑ひさぎめいて

それは二人に砕ける

『龜裂』より

異同を確認しながら、二つの王様について語ってみたい。まず書き出しから――。

ヴァ\*模様の皿を描線を抜けて燕は去つた

龜\*模様の皿を秋冷が洗ふと／燕はしきりに／

南の砂丘を懐かしんだ

前詩では燕は模様の皿を抜けて過ぎ去るだけだが、後詩では秋冷が皿を洗い、燕は南の砂丘を懐かしんでいる。ここでは「懐かしむ」という感情があえて付加されていることに注目したい。以前の父親と同様に病床に就いていた寺岡氏の心情がここに明確に定着されている。

つ世、つまり生涯すべてであり、取り返せないすべてという時間的なものでもある。さらに個人を越えて、人を左右した社会や思想、関わったすべても船を構成している。

「明日、わたしの影はあない」……何と哀しく寂しいことだろう。その切所と彼は対峙している。力むことも、峻拒、全否定することも不可能……受け入れること、それだけだ。

(同時にわたしは逆らっている、揺るぎない受容などあり得ない、その境地にまだ至っていないと。命ある今を生きたいと。できることなら悲しまず、死の影を恐れず。薄つぺらな安易な生を生きているにすぎないか……)

## ▼有時秀記

今回、寺岡さんの遺した四冊の詩集をあらためて通読して、「凍港」を朗読することとしますが、寺岡さんの詩の前提には、「空を観する」ないし「悲の痛感」とも言える理と心情があると思います。私の朗読しようとする「凍港」もそのような詩表現と思われまます。そして「凍港」の詩的空間は「透光」にも通底する磁場を感じさせるのです。

## ▼福田知子

寺岡良信の四冊の詩集には同じタイトル詩が四篇ある。「誘惑」「王様」「幸福」「海市」である。その理由を彼は詩集『龜裂』の「あとがき」に次のように書いている。「：愛着が深く、未熟な表現を今一度改め構成を練り直すことによつて新たな作品として収録：」したと。「王様」というと、一つは処女詩集『ヴォカリーズ』(2006.11)に収められ、もう

ヴ\*腹の底に真つ赤な夕焼けが溜まつて  
龜\*腹ん底に真つ赤な夕陽が溜つて

ここでは、「腹の底」が「腹ん底」となり、そこに溜まるのは「夕焼け」から「夕陽」と変化している。「の」が「ん」になったのは、より自分の呼吸に沿った表記にしたからではないだろうか。「夕焼け」が「夕陽」になったのは、そこに僅かばかりの希望を見出したからではないだろうか。たとえそれが腹に溜まる真つ赤な「血」であつたとしても……。最後の個所は次の通り。

ヴ\*王様よ／二人の迷い子よ／海の影法師に抱かれ／もつと遠くで／波が砕ける  
龜\*王様よ／迷い子よ／海は巨きな影法師／笑ひさぎめいて／それは二人に砕ける

前詩の迷い子の二人は陶器屋と理髪店であるが、後詩では迷い子の二人は共に一体となつて、海という巨きな影法師に抱かれ、笑ひさぎめいているといつたイメージに昇華している。ここでは自らも父のいる彼方の国に向かう日の近いこと、そのことへの覚悟と断念、そして二人を大きく包み込んでくれる海という影法師へのささやかな希望がみえてくる。

## ▼北村虻曳

寺岡氏が北の句会で詠んだ句で私の気に入ったものを挙げる。

1. 荒星やマドロスパイプ添へる棺 2011/10
2. 彫り深き古仏の微笑花の雨 2014/04
3. 連翹やチヨゴリの老女外股に 2014/04
4. 辛夷咲くかの世のそらの残寒に 2014/04
5. 秋冷に忘却という刃こぼれも 2014/11

一つは最後の詩集『龜裂』(2014.02)に収められている。

『ヴォカリーズ』に収録された「酔ひざましの子守歌」「軒」そして「王様」の三篇は、寺岡詩の中で異彩を放ち、ひっそりと照れ笑いしながら佇んでいるように私には思われるのだ。おそらく、当時闘病中だった父を思う寺岡氏のユーモアとペーソスがここに息づいているのだ……。

王様

模様の皿を描線を抜けて燕は去つた  
店晒しの陶器屋も看板だけの理髪店も  
夕昏れはいつそう  
そぞろ寒くて虚ろだ

遠くで波が砕ける

所在ないねえ

と

陶器屋が端の歩を突く

理髪店も端の歩を突く

遠くで波が砕ける

陶器屋はちらと相手の顔を覗く

理髪店もちらと相手の顔を覗く

腹の底に真つ赤な夕焼けが溜まつて

奴さん

目が潤んであはしまいかと

互ひに相手の顔を覗く

王様よ

二人の迷い子よ

海の影法師に抱かれ

もつと遠くで

波が砕ける 『ヴォカリーズ』より

王様

模様の皿を秋冷が洗ふと  
燕はしきりに

6. 大犬座櫃を燃やして終わる旅 2015/01
7. 辛夷散る此岸のひかり眼に遺し 2015/03
8. 波がきて人魚の檻をあらふ夏 2015-05
9. 石棺のミイラの吐息野ばら散る 2015-05

1は彼の詩に出てくる典型的な場面である。海が一人で世界に対峙してきたのだ。「荒星」は木枯らしの中の星で季語。  
2,3には彼の無辜の民衆に対する親愛感が現れている。

5は「秋冷」の冷たさや、「忘却」の欠落性が「刃こぼれ」通じる。そうしたことが無意識に作用するためか深みがある。この句だけは映像的でないだけにやや難しい句と言える。  
6〜9は彼が死を逃れられないものとして意識していく過程に照応しているだろう。

8は新しい人魚像を作り上げた。救いに行きたい。  
9は投句締切から見て死の一月余り前の作か。そんな死者になつてみたい気もある。  
寺岡氏は手元にある「北の句会」の会報によると、2008年から亡くなる直前の2015年まで北の句会に投稿、出席をされていた。それ以前から作句はされていたようである。北の句会では初めからかなりの得点をされていたが、最後の2年ほどは抜群の活躍であつた。

氏の句はむろん有季定型であり、彼の自由詩と同様、とても純粹で端正である。内容が悲痛な美学、ロマンティックに満たしていることは氏の詩と同じだ。絶対的にネガティブな世界を渉る主人公、詩の斬新さではなく完璧性が目指されている。

しかし、その内容を俳句にもつてくるとあまり例を見ないものとなる。かつて私の定形短詩に強い共感を寄せて頂いたが、彼の完全性からは程遠い私に何故だろうと思つた。今思うと、ジャンルが期待する内容からはみ出し方が共通するからではなからうか。共有するものはベシシズム。しかし彼には一種の宗教的と言つても良い肯定性がある。

◆ 壁

北岡武司

わたしの壁の奥は  
わたしにも見えない  
他人は はねつけられ  
寂しい思いで離れていく

溶けない心  
張り巡らした壁で  
わたしは何を隠すのか  
わたしにも分からない

わたしはわたしに何を  
隠しているのだろう  
それが分かれれば  
壁も消え風がながれて

原っぱで  
かろやかに  
ゆれてるだろう  
ポピーのように

ce qui revient à dire en somme  
qu'entre nous et l'existence nous in-  
terposons des écrans de plus en  
plus épais. — Gabriel Marcel : Le  
mystère de l'être L.Réflexion et mys-  
tère, Aubier 1951 p. 10 「結局、われ  
われは壁、それもすこしずつ厚くなっ  
ていく壁を己自身と存在とのあいだに  
置いているということになる。」—ガブ  
リエル・マルセル『存在の神秘』より「反  
省と神秘」、オービエ書店、一〇ページ

◆ 月光を浴び

北岡武司

うまのせ山が夕日にそまります  
罪に戦き体中の骨が砕けそうです  
タヌキ岩の穴蔵を通り映世を抜け出した  
悪霊が蔑み嘲るたびに骨がふるえるのです

どうすればよいのでしょうか この私は  
息を吸うも吐くも苦しうございませ  
身も心も打ちのめす悪霊に打ち勝つには  
おなじ悪霊を養うしかないのでしょうか

唆しの声が聞こえぬよう耳を塞ぎます  
照り返す壁を眺め日暮れを待つことにしました  
逃げるよと仰るのですか この世のどこへ行くと  
どこへいこうと恨みの眼差しが待っています  
タヌキ岩の穴蔵から空を見あげます  
うまのせ山から赤い赤い月が昇りました  
月がたかくしろくなれば空を見あげ  
草むしろに寝そべり光をあびましょう

骨が砕けそうな戦きはきえずとも  
岩に降り注ぐ月光で私は光り輝くでしょう  
堅い堅い岩穴に横たわった私を  
どうかそばで見守ってください

きつとあなたは月光に溶けてここにきて  
私を照らしてください  
私のたつたひとつの願い

—誰をも蔑み嘲りませんように

◆ 虹

北岡武司

虹よ おまえは私の友  
翼下遠くの  
しろい雲にあらわれ  
どこまでもついてくる

驟雨のあと  
大きな半円となり  
華やかな色で  
目を奪う天の弓

近ければ小さく  
無限に小さく  
広がりを見失い  
この目のなかに消え入る

触先で波が割れれば  
しぶきのなかに  
まんまるな姿をみせる  
虹よ おまえは私の友

私のうちに隠れ ともにいるが  
霧吹きひとつで

調和の幻想を  
光と水が奏でる

おまえは私を包み  
私はおまえを  
背負つてあるく  
私のなかにいて私を包む虹よ

私を飾ってくれる虹  
まるで神さまのようだ  
虹よおまえは私の友

◆ レクイエム

—二〇一七年八月二六日

北岡武司

今日 あなたは天使になった  
司祭が祈りを唱え香炉をふり  
薫りが礼拝堂にただよいます

祭壇まえの棺で  
白ユリに身体をつつまれ

天使の顔が見えています

いつか 日傘を差したあなたと  
すれ違ったことがありますね  
向日葵たちがあなたを見つめていた

顔を合わせるとこんな私にも  
ほほえみを贈ってくれて  
あなたは天使のようでした

別れるまえにはかならず  
哀れみのハグをしてくださいましたね  
いつも これが最後と言わんばかりに

今日 ほんとうに天使になられた  
永遠の静けさに安らおうと  
あなたは変容の時を待つ 時を待つ

神の国の人たちが天使の装いで  
光を受け輝いた顔をこちらに向け  
ほら あなたに手を振っている

永遠の静けさのうちで  
天の人たちと一緒に私たちを  
見守ってくださいますでしょうか

## ◆突風

黒田ナオ

ばさばさと歩く  
台風がやって来る

でも、ばさばさと歩く  
マヨネーズを買いに

突風が吹いて来て  
吹き飛ばされた私は  
マヨネーズを手を持ったまま

大きく渦を巻いて  
高く高く舞い上がりながら  
作りかけたポテトサラダのことを  
思っている

もうすぐ何かが  
やって来る

小さな窓は  
遠ざかる

そこは、私の帰る場所  
ポテトサラダを作る部屋

## ◆段ボール工場

中嶋 康雄

段ボール箱のデコボコが  
派遣の工員を舐めている  
工員のあらゆるデコボコが奪われて  
真っ平らになり  
鼻や耳のあった部分は  
ただの穴になっていいる  
段ボールの原料がトラックで運び込まれ  
逃げ惑う緑のミミズを踏み潰してゆく  
工場の制服は緑だ  
工場内で働きそのまま寝泊まりする内に  
派遣工員が絡み合っている  
絡み合ったままミミズになってしまう頃を見計ら  
って

新しい工員が派遣され  
早く段ボール箱の工程を習得するよう  
工場長から訓示を受ける  
夕方になると  
先輩がのつぺりした顔で酒の席に誘う  
酒の肴は落ちている  
「この辺は北だから美味いんだ」  
絡み合ったミミズの制服の  
上手な剥き方を教えてくれる  
下部の僅かな突起物を摘まみ  
「これはもと男だったから美味しくない」  
つまらなそうに教えてくれる  
工場長が行方不明になり  
代わりの工場長は赴任しない

## ◆解雇

中嶋 康雄

ミミズがミミズを剥きながら  
「これは工場長かもしれない」  
ブラブラさしているミミズの腰が肥っている  
「サーロインステーキが好物だったからね」  
下腹部を強く押すと新入りの顔面に  
肥ったミミズの黄色い尿がかかる  
「くさい、くさい」  
なくなりかけている鼻がひん曲がる  
ほとんどミミズになった先輩たちが  
ない指を指して  
体をすり合わせて笑っていると  
遠隔操作される機械から  
殺虫剤が噴霧される  
支配が証明され  
新しい派遣社員が続々  
古いバスに乗ってやって来る

もう行かなくてもいい  
もう  
やっとなにをいつたいたいのだろう  
あんまりにも  
つらいことは  
もう  
どこへゆけばいいのだろう

焦げ臭い体は  
まだ  
ぼろぼろの紙切れは  
まだ  
廃墟だと思つた  
廃墟はもつとこわれて今も  
廃墟だ  
歩く  
誰も呼ばず  
誰からも呼ばれず  
誰も思い出さず  
何も望まず  
ただ  
買い食いくらいはするかもしれない  
タクシーは走り去る  
降りたい人は降りられず  
降りたい人は乗れず  
無人が増える  
だれのための無人だろう  
だれのための  
横でふるえている  
たぶん名前はない  
もういなくなるから  
名前はいらぬ  
なつかしい人に会いたい  
だれでもいいから  
なんでもいいから  
なつかしい話をした  
今は  
どこへ  
行けば  
嘘でもいい  
欲しい



## ◆湖水の村

福田 知子

夜ごと  
星々に蝕まれていくカゲロウたちと  
回り舞台で踊り続ける嘘つきのアリア！  
クッククックとまくわ瓜売りがやってきて  
幸福の鳥をくすぐって塩漬けにしちまった朝  
湖水の村のゆるキャラ猫が公園のベンチに寝転  
んで  
ゆる手で戸惑いの蜜をカゲロウたちにそつと手  
渡す

待つて！  
そんなご立派な志はこの舞台にはそぐわない  
支払いきれない請求書は甲高い声をあげてアリ  
アの餌食となった  
コップは甘つたるい糸をひいて玉のような汗を  
かいている

ふあふあふあ〜 ぶあぶあぶあ〜  
いつもの時間になると湖を越えて豆腐売りがや  
つてくる  
うらぶれた音楽を奏でのおもちやの喇叭を吹いて  
この村にやつてくる

——踊り続けるアリアの話は  
もうこれつきりにしない？  
お城の あの ゆるキャラ猫も  
クッククックとやつてくるマクワ瓜売りも  
日蝕までに帰らないと舞台は消えつちまうわよ

隣村からやつて来たきゆうり夫人は  
みんなの香気にグサリと緑のとげを刺していく  
でもみんなはすつかり慣れつこになったのかま  
るで平気な風  
それはきつと次のお祭りに心は移っていたからだ  
ゆるキャラ猫の祭りでの舞台公演を告げる  
てらてらしたピンクの看板やチラシ  
スマホに被せたスパンコールのつけ耳  
これらを歓迎する村の子どもたちの一方  
風紀を乱すと強硬にいぶかるご近所の紳士淑女  
の皆様方にも

明日は聖なる公演を贈ろう…という  
ゆるキャラ猫のけなげなる行為を目前にして——  
ふあぶあぶあ〜 ぶあぶあぶあ〜  
マクワ瓜と豆腐ときゆうりを常食とする  
この平和な湖水の村にも とうとう  
国家秘密衛生管理局から最高級レベルの官僚た  
ちがやつて来た

——《村を無菌化するゆめのゾーニング》を  
祭りまでに是が非でも実行したい！

## ◆よしばう

大橋愛由等

しのつく雨で線がカタカタ泣いて  
(コードがつながらない。いったん断念した石と石の会話はよ  
こぼうが語り始めるのを待つているのか。橋のたもとで白枯  
梗の花弁を燃やした友人は小舟でいったどこへ行くこうとし  
たのだろう。茄子の Pasta を食べた後にキルケゴールの話題  
を出すのは違反だと何度か伝えたのだけれど今日もぼんやり  
斜塔をながめていただけの一日だったとあなたは言いたいの  
でしょ。それはきつと龜裂をながしるにした国王陛下の末  
路を面白おかしく(わたし)に語ろうとした夜明けの譚に近い  
ものがある。手をもみ足をもんで坂を登っていったら山羊が  
居間に棲みついている家からじつと(わたし)たちをカーテン  
越しに見つめていて「いつ、いつ、いつ」との呪縛に似た山羊  
の口癖が耳からはなれないことを悩み始めているのだと手記  
に書き記そうか。時計回りをあらがってみせる木曜日深夜  
には地軸のゆがみを感じるのだとぼくが言い張つてみせて  
その執拗さに利休鼠の巾着をなげつけられたのはアレとソレ  
との交接がうまくいかなかったせいかしら。日々ますます透  
化する(わたし)は角を曲がることに恐怖するようになり「こ  
れは昨夜塩味アイスキャンデーをほうばらなかつたのがいけ  
なかつたのか」と嘆いてみせる。横風が吹いたら夕顔が間違  
いなく黙りこんでしまうから帽子をまぶかにがぶつて横風を見  
ないようにしているときに限って横風に見つかり「ワン」と云  
つてその場を切り抜けようとする(わたし)と(わたし)はよ  
こぼうなのだろうか。

しかしそれは もうはじまつていた  
みんなが気づかないうちに——  
じわり ジワリ じわり ジワリ・・・  
ぶあぶあぶあ〜 ぶあぶあぶあ〜

——あついにあのみすばらしくも懐かしい豆  
腐売りが行つてしまう！  
きゆうり夫人は緑色の目を真っ赤にはらして号  
泣した  
マクワ瓜売りは幸福の鳥を縞模様の塩壺から取  
り出しそつと天に放つた  
聖なる公演を目論んだピンクの看板はガタピシ  
音をたてて強風に倒れ  
かがやかしい埃を地面に散らした  
ゆるキャラ猫は舞台公演DMの手書き文字 そつ  
ゆる手を舐め舐め書いた宛先の文字がスパンコ  
ールに反射する  
そのかわゆらしい文字が 村じゅうの住所が無  
残にも  
ゆるゆる消されてゆくのを悲しそうにただじつ  
と眺めるばかりだった

ドーンと轟音をあげて花火の上がつた祭りの翌  
日——  
平和な湖水の村には強い土壤無菌化の薬が撒かれ  
もうこの村には誰も二度と住めないことを知ら  
されたのは  
それから百年後のことだった

## ◆ 場所

### 有時秀記

#### 1 或る戦地

誰がわたしをこの島の最前線に送りこんだのか。自分の意志ではなく、わたしは抗うこともできずに、南の島の最前線に來たが、ここはこの世の地獄だ。北から多くの敵兵が押し寄せる場所だ。ここから押し戻せというのか。わたしは二十五歳だ。まだまだ人生に夢を持って、花を咲かせたいと思っている。しかし、ここは戦地だ。もうすぐ激戦が始まると上官は言う。それは本当に始まるだろう。北の方で銃声が空に三発響いた。始まるのか。体に震えがやってくる。寒気がして唇も震える。それを同期の兵士に見破られないように静かに身を潜めるが、同期の兵士も震えている。前進し、さらに匍匐前進する。敵兵はすぐ至近の場所にいる。銃撃戦が始まる。体を伏せながら応戦するが銃はやや高めの角度に、四十五度位上の角度に向けて撃つ。これだと敵兵には当たらない。わたしは迷った挙句、見知らぬ敵兵を打ち損なうようにする。自殺行為だが、敵兵は相似した人間精神を持つから銃撃はためらわれる。だが、前方から激しい銃撃が連続して聞こえる。わたしは頭を伏せ上空四十五度に構えて銃弾を空に放つ。敵兵の銃弾が頭の鉄兜に二、三発当たり、跳ね返る。死地においてわたしは思う。わたしの二十五年はなんだったのか。長兄は既に病死して、いない。母もその翌年病死した。長兄は二十三歳、次兄は二歳、母は四十六歳。皆、若すぎる死だ。わたしもまたたかだか二十五年で人生を終わるのか。この見知らぬ場所。ここはわたしの場所では

ない。わたしの精神は身体とは裏腹にこの場所にいることを拒んでいる。わたしの家郷に魂を置いて來たのは、また再び帰るためだ。魂は家郷にある。家郷はわたしという存在の根拠たる精神の育まれた場所だ。わたしはこの戦地に体だけを運んできた。魂は戦地には持つて來ていない。

戦況はしかし、さらに不利になった。西からも多くの敵兵が押し寄せてくる。この部隊は北と西から挟撃されている。銃弾は北と西から激しい銃撃音を伴って寸分の隙間もないほど飛んでくる。ここはわたしのいるべき場所ではない。こちらからの銃撃音は北と西からの銃弾の前にかき消される。わたしの鉄兜にかなりの銃弾が当たり、陥没する。わたしはまだ生きているが、ここはわたしの魂がいる場所ではない。そう思ったとき、体から血が流れ出すのに気が付く。わたしは生きたいと思い、絶望的に敵の頭上に銃撃する。しかし北と南からはなおも雨霞のように銃弾が飛んでくる。わたしは昏倒する。意識が薄れて行く。血が流れる。わたしは帰る。わたしの場所に帰る。この狂気の場所、わたしの体は肉と霊で成るソーマだ。いま体は捨てさせられる。なんとこの運命か。二十五年だけの人生。死苦の中で救いはあるだろうか。理不尽な運命愛の果てには、ある、と信じなければ死ねない。機銃掃射が地獄に撒かれている。

#### 2 亡霊の楽園

わたしは精神ではない。最早人間として生きていないからだ。魂魄として、わたしは家郷に帰ったが、そこはもう家郷というよりは楽園なのか。まだ、認識できないでいる。いやそもそも認識なるものは人の能力だ。わたしはもう人間以上の何ものかだ。先に逝つた兄と母に会える場所が、楽園なのか。まだ楽園とは確認できないでいるが、そうであること

## ◆ シジミチヨウ

### 高谷和幸

墓石を頭上に持ち上げて、「あなたたちには属さない」と叫ぶ死者がいた。あれはわたしの夢の世界だったのだろうか。ディアローグの記憶がいつの間にかに「わたしとわたしたち」のすまいの野草が群生する空間にあらわれたりきえたりしていた。ルリシジミチヨウ、四枚の翅を上下にずらす、あれは単体の記憶ではないところから、呼び寄せてはひらかれる死者のぬくもり。翅の中心から伸びていくようなあわい斑点があり、体内の衝動のリズムがわきあがり「ふち」まで進んで、くすんだ泡でおわる。裏側を見届けることができぬむらさきの空間が、ルリシジミチヨウのセルに覆われたヴォールトのように思えたりもする。二つの垂直に伸びる壁に張られた見えないところにある梁。「わたしとわたしたち、思い出せば、石の壁に止まっていたことがあるよね」。内的空間に架ける装置。それは「局所的な銀河の腕（オリオン・アーム）と言われる」すまいかもしれない。わたしを見つけると「挨拶をするように」周りを何回も飛翔した。顔のそばに白っぽい翅がひらりひらりと近寄ってくる。住宅地に生息する彼にそのような習性があったのかは別として、「わたしはあなたたちには属さない」その声は怒りを含んでいた。

がわたしの望みだ。ここは沈黙の場のようだ。時は存在しないが、場はある。仮に魂魄と名付ければ、わたしはいま魂魄だ。ここにはダンテもいるだろう。ブルーノもいるだろう。あまたの知者がいるだろう。地上の敗者にして知者なるものがある。この情景は、地上で得た僅かな知恵の書の残り香で描くことができる。ここは地上性を脱した聖なるものたちが転位したのちの爾後の場所だ。パラミターから想定される楽園でもありミロクが待つ場と見做せよう。あるいはミロクは既にいるやもしれぬ。ニユーテスタメントの指し示す奇跡の場所でもあるだろう。スーフィズムの秘術で転位した場所でもあるだろう。不運にも若すぎる死を賜った二人の兄も、生き切れなかつた母も善のイデアリズムを易々と体現してしよう。

そうであると、わたしの、仮に魂魄と名づけられた魂は想っているが、わたしの戦死ののちの遺骨はいまだ家郷には帰らずに戦地であつた島に眠り、家郷には石碑のみが立っている。しかし葬いというイニシエーションが幾たびも行われたので、それが地上性においては救済の一部を成している。が、全てではない。地上性においては全ては未完であるから、知者なる敗者を生み出す。魂魄はダンテ・アルギエーリの「地獄篇」のように聖なる復讐を記述するとき、最高知の浸透した音楽的楽園が現成するのである。ダンテのエンテレケイアは『神曲』であつたのだ。楽園が有るべき場所は地上性を脱している。それを準備するのが救済の事態だ、と、死地で理不尽な運命愛を選ばざるを得なかつたわたしは苦の中で悟りの境地を偷み得た。そして転位した場所ですら真なる知者たちとの至福のコイノニアを過ごしたいと想っている。死以上の如何なる秘術的超越的転位を体現すれば至福の場は立ち現れるだろうか。



## 喜山荘一

## 1. ふいに書かれた「琉球弧」

知るにつれ驚いたのは、奄美大島から与論島までを「ひつくるめた総合的な名前が見当たらない」（「アマミと呼ばれる島々」）ことだった。

「奄美（群島）」があるではないかと思われるかもしれない。しかし、島尾敏雄は気づかずにはいなかった。「奄美」や「奄美群島」では「強いてひとまとめにしようとする意図が目立って、生活感情の中からしぜんに生まれてきた言い方ではない」（同前）。「沖永良部島や与論島で、自分の島が奄美と呼ばれていることを知ったのは、やつと昭和に入ってから」（南島について思うこと）と言われている。「観念的にはアマミの中の一つだと理解していても、島々のあいだに差異が多く、何となく実感としてびたりとこない」（同前）。それどころか、「ひとまとめにして奄美と呼ばれることを拒んでいるようにも見える」（加計呂麻島吞之浦）くらいなのだ。

島尾が奄美大島に移住して、最初にぶつかったもののひとつは呼称だった。しかも「総合的な名前」を持たないのは島々についてだけではなかった。それより前に、島尾は加計呂麻島の島人が、島を自分の住む集落の名で呼びこすれ、「島そのもの」が「かけろま」と呼ばれることを知らなかったことに驚いていた。「総合的な名前」を持たないのは、島々だけではなく、ひとつの島自体についても言えることがあったのだ。

島人が島の名を持たなかったのは、おそらく加計呂麻島に限ったことではなく、奄美大島もそうだった。島を「罵」と表記したのは大和朝廷だったし、「大島」にしても元は大和や沖繩島からの呼称だろう。加計呂麻島の島人が島を集落の名でしか呼ばなかったように、奄美大島の島人も集落の名でしか呼んでこなかった。島全体を捉えて呼ぶ必然性がなかったからだ。

琉球弧の北に位置する奄美大島は、島人の必然性が、島全体を捉えるように

いう概念は、このときすでに掌中にあつたようにも見える。もし後者だとしたら、この「あとがき」の「琉球弧」はとても控えめな初出だ。しかし、実のところその印象は本文でお披露目した「奄美の妹たち」でも変わらない。なにしろ、「琉球弧」といわれる奄美から沖繩、先島にかけての南島」と、括弧で強調しているものの、すでに「琉球弧」という言葉が流布されているのを前提としたような書き出しなのだ。

この控えめな態度は、琉球弧について書くとき、終始変わらなかつたと言っている。しかし、態度は控えめでも「琉球弧」は、やわらかで強力な概念だった。この言葉がなければ、わたしも、島尾と同じように座りのいい呼称の不在に突き当たるしかなかつただろう。

「琉球弧」は、島尾が沖繩を訪ねる前に、「奄美」の島々を見聞するなかで、沖繩、宮古、八重山にも通じるものを予見した言葉であり、かつその過程で、呼称の不在や「琉球」に対する島人の抵抗感を通じて掴まれたことからすれば、奄美的な用語だった。あるいは、「琉球」という言葉に対する反発を、島尾は沖繩自身にも見出すことからいえば、とくに宮古や八重山から発されたとしても不思議ではなかった。また、「奄美、沖繩、宮古、八重山」という言い方では、ひとまとめにならないし、主島と離島という考えを伏在させてしまうことからすれば、それぞれの島を主体に据えた、それこそ島発の言葉と言つてよかつた。

## 2. すぐに続いた「ヤポネシア」

一九六一年の春、「奄美の妹たち」で「琉球弧」の概念を提示した島尾は、やくもその年の冬には、日本列島を表現するもうひとつの言葉として「ヤポネシア」（「ヤポネシアの根っこ」）を提唱し、その南の部分として「琉球弧」を位置づけてみせた。ふたつの概念はほぼ同時期に提示されたのだ。

これは不思議なことではなかった。島尾は、奄美大島へ移住する際も、千葉あるいは東京を離れたとは書かずに、「本州島を離れた」（「奄美大島から」と書く人である。もともと宇宙の高度から降ろすような視線は彼のものだった。だから、「琉球弧」という言葉を編み出す前から、島々を「九州島と台湾島の北端の間に連なるこの島々」（「南西の列島の事など」と「天界からの俯瞰」（同前））で見ていたし、また、「島々を結んだ線は、こころよいたるみをもって張られた縄のように、浅いカーブをこしらえながら、台湾島の方に手をさしのべています」（「鹿児島県立図書館奄美分館が設置されて」と、物や人のように感覚的に捉えようと

なる前に、主に大和からの視線に捉えられ、最初に「海見」、次に「大島」、そして近代以降に「奄美大島」と呼ばれるようになった。その間、按司（首長の存在が島々をまとめあげることもなかつた）。

「奄美」という言葉自体が、内発的な呼称として奄美大島全体に行き渡つた歴史を持つていない。島人による政治的共同体が「奄美」の島々を圏域とした歴史もない。これが、今に至るも「奄美群島」が、そう呼ばれつつも「総合的な名前」として根を下ろさず、また他に「総合的な名前」も持つていない経緯だ。ともあれ島尾は呼称の不在という不思議さに触れて、むしろ呼称について鋭敏になった。島々について言う場合、「奄美」ではなく「アマミ」というカタカナ表記にしたのはその試みのひとつだ。

そのうえそこには、もうひとつ「琉球」に関わる問題もあつた。一六〇九年の侵攻以降、薩摩に組み入れられた歴史をもつから、「奄美には沖繩的なものを拒否したい気持とそれに帰納したい願望とが相反しつつ同居している複合の状態のあることも認めなければならぬ」（「私の中の琉球弧」）。島尾はそこで「琉球」という言葉が現地で受け入れられないのを察するようになる。

しかし島尾は、もとより「南島」という言い方が好きで、奄美大島のことでも、「花ざかりのかたちをした南島の群れのひとつ」（「九年目の島の春」）として見ているし、「奄美」を主語にしても「沖繩」を主語にしても、それは象徴でしかなく、断らない限りそこにはいつも奄美、沖繩、宮古、八重山の全体に浸透させようとする目を持つていた。こうして「南島」という「少しあいまいな表現」（同前）ではなく、より照準を合わせようとする試行のなかで、「琉球弧」という言葉がつかまれることになった。

奄美大島に移住して五年ほど経つた一九六〇年、「南島探検の過程の報告書」と位置づけた本のあとがきで、島尾はこう書いている。

現在では私は、大島のほかの四つの島の徳之島も喜界島も沖永良部島も与論島もひととおり見てきましたので、それぞれの島の輪郭をひとつずつ描くことによつて、大島との対比の中で琉球弧の北の部分としてのアマミをつかみたいという期待に充たされて居ります。（「離島の幸福・離島の不幸あとがき」）

この初出の「琉球弧」は筆の勢いでふいに書かれているようにも見え、それから一年後の「奄美の妹たち」の本文で紹介されることになる「琉球弧」と

もしていた。

この、島々の連なりとして捉える視点が、南太平洋の島について書かれた人類学者の本を読む機会を得て、その「南島群」が「何とわれわれの列島の南底部に孤独なすがたで配置された小さな島々と似ていることか」（「南島について思うこと」という気づきを得れば、もともと日本列島を「花綵列島」と表現した人である、「三つの弓なりの花かざりで組み合わされたヤポネシア」（「ヤポネシアの根っこ」という発想にたどり着くのはすぐのことだっただろう）。

「天界からの俯瞰」をものにしていた島尾にとつて、「琉球弧」も「ヤポネシア」もつかみ取るのは自然なことだった。しかし、そこに名づけを行なつたことで見えてきたものは骨太で大きかつた。

「琉球弧」と「ヤポネシア」の概念を提示した翌一九六二年、島尾は奄美大島で「私の見た奄美」という講演を行つている。そこで島尾は、「なにか日本の歴史の重要な曲り角の時には、必ずと言つてもいいほど南の島々のあたりが顔を出して来る」と指摘している。

「続日本記」には奄美、夜久、度感、信覚、求美などと、南の島の名が出てくる。そのことについて島尾は、「日本列島の中に国家らしい国家ができたその時に、南の島の記録をはぶくことができなかつたということは、やはり重要な意味を含んでいると私は考えるのです」と語っている。

日本の初期神話に南島の顔ぶれが出てくるところは、大和朝廷の版図が琉球弧にも及んだことを示す証左として引用されるのが常だ。しかし彼は、「何かを感じとつたから記録として残したのだと思います」と、そこに別の余剰を見ようとしている。そして、にもかかわらずその後は「本土のほうと全く切り離されて」しまふ、と続けている。

「鉄砲」は、「種子島」から入ってきたが、それはヨーロッパの文明の象徴と言えるもので、中国の儒教やインドの仏教と「同じ比重でもつて」捉える必要がある。日本の音楽に大きな影響を与えた「三味線」も「沖繩」から入ってきたものだ。

鎖国の終わりも、発端はアメリカの軍艦が「ふらふらはいつて来たところが浦賀」だったわけではなくて、「まず沖繩の那覇にやって来て、そこを根拠地にし充分足がかりにしたそのうえで、日本本土のほうにやって」来ている。その後の新しい政府にしても、「薩摩藩は南島を犠牲にすることによつて明治維新を動かすことができた」。さらに第二次世界大戦でも「南の島々を犠牲にすることによつて、国家がどうやら安泰であるような方向」を見つけることができ、



「それは現在もつづいている」。

つまり、「日本の大きな曲がりかど」では、南の島々から「本土のほうになにかしらざわめきのサインをなげてよこす」。しかしその顛末は南島の「犠牲のかたちに傾きがち」であり、「本土のほうはそのことにも、その地帯のことにもほとんど理解をよせようとしないように見える」。島尾は、このことは「私に強い感動をあたえてよこす」と話している。

ここまでくれば、五十五年前に行われた島尾の講演が、鋭く現在を照射していることに驚かざるをえない。本来、ヤポネシアという視野は、大陸との関係で捉えられがちな日本を太平洋の島々のひとつに解放するというモチーフを持つているから、ここでの文脈は「ヤポネシア」というより「日本という国家」に沿ったものだが、しかしここには、中心に凝集しようとする「日本」に対して、個々の島を等価に捉える「ヤポネシア」の視線が息づいているのを見ることが出来る。

やがて島尾は、「琉球弧と「東北」のあいだに「なにか類似の気分の流れている」のに気づいていく（琉球弧の視点から）。そしてここでいう「東北」には「アイヌ世界が透きさながらにうずくまっっているようなもの」（同前）だった。東北といえば、福島が島尾敏雄の両親の出身地である。この出身への足場を得たこととて言っていないだろうか、島尾の言葉はいつになく熱を帯びることもあった。

（前略）私が言いたいことをいそいで言ってしまうば、たとえこれまでの日本人の目の位置が九州から関東までしかその視野に入ることができなかったとしても、私はそれに服したくないこと。東北や琉球弧が負のかたちでもつている日本の要素をはつきりつかみだすのであれば、日本のかたちはいびつでしかないこと、の二点だ。（私にとって沖縄とは何か）

東北や琉球弧が負性として持つ要素を掴むのでなければ、日本の「かたち」はいびつでしかないという熱を帯びた主張は、これも今でも生き生きとしているのに立ち止まらないわけにいかない。

しかし、ご本人のその後の態度はそれとは別のところにあった。一九七三年、「非小説」を集めた本の「あとがき」で、学んだことは「ヤポネシア・琉球弧の視点」かもしれないとして、島尾はこう整理している。

「図書館は書庫に書物をしまいこんで閲覧者のやつてくるのを待つてばかりいないで、町や村のすみずみにまで、船やジープや自転車や書物を持ちこんで、それぞれの家庭に配って行くところまで行かなければならぬ」とさえ考えられています」（最近の図書館の動向）と、島尾は書いている。控えめな彼は受け身で書いているが、わたしたちは「巡回貸出文庫」にも、大は小を兼ねるとは見なさない「琉球弧」の思想が息づいているのを感じることが出来る。

そればかりではない。島尾は「奄美郷土研究会」を発足させ、例会を開き会報を発行している。「読書会」も開催した。実に、「奄美」で文字を読む、文字を通じて島を考える環境を整えていったのは島尾敏雄だったのだ。

そのうえ「長いあいだ自分たちの島が値打ちのない島だと思ひこむことになれてきた」（奄美―日本の南島）奄美を、島尾はかばい続けた。

奄美の島人が口にしにくいことでは、歴史が明らかにするだろう（奄美・沖縄・本土）という主張がそうだった。また「琉球弧」というコンセプトを提にしたときには、「琉球弧は本州弧のペンダントではない」（琉球弧に住んで十六年）、「独立政権を持っていた琉球や、まつろわぬ蝦夷地の東北が、日本歴史の展開にどれほど役立たなかつた異域だなどと考えることは私にはできない」（奄美・沖縄の個性の発掘）と強い口調にもなっていた。

「結論として日本と言えなければ日本でないと言つてもいいじゃないか」（琉球弧の感受）、「奄美と沖縄とで一緒になつて独立してもかまわないのですね」（明治百年と奄美）とまで言つてのけることすらあった。

つい、威勢のいいことを口走つたのではない。

島人は「自立の精神が欠けている」（多くの可能性を秘めた島々）とよく言われる評言に向かって、それがいいのではなく、「深い所での屈折」があつて、「対外的な表現の場で、よけるのではないか」という観察と洞察に裏打ちされた励ましでもあったのだ。

しかし、奄美に対して冷静な目を向けた島尾もいる。「奄美は訴える」というタイトルなのに、中身は「奄美に訴える」ことの方を多く書いているエッセイにも表れているように、島人との関係のなかで発せられているからだろう、目立つのを避けるように書いている節もある。しかし、実は「奄美に訴える」ことも率直に開陳されていた。

なかでも真つ芯で捉えているのは、島人の精神性を「事大主義と権威の否定とがひとつの精神の中に同居していてそのゆれ動きが激しい」（多くの可能性を

最初は、「用語の発見のための試行が重ねられている」。用語が現れる前は、「南島への心情の過多を処理しかねている」。そしてこう続く。「それはやがて用語の出現と共に、いったんは或る安定を得たあとで、今度は次第に南島に対する心情の発露の臆病な傾斜へと傾いて行くのである」（島尾敏雄非小説集成「第一巻」）。「臆病な傾斜」とは、「憂鬱な旅人の不安定な感受」（琉球弧の吸引力的魅力）が、あとがきを書くタイミングで言わせたものかもしれない。このときには、奄美大島を離れる心づもりになつて来たことも想像される。

しかし、「ヤポネシア・琉球弧の視点」を提示した人の総括としては、あまりに控えめで、本人の深刻さをよそに、わたしはこのところで思わず笑つてしまつた。

「ヤポネシア」にしろ「琉球弧」にしろ、いまも充実を待っている魅力的なコンセプトであることに変わりはない。そして彼の「非小説」群は琉球弧に大きな励ましを与えてきた。ことに「奄美」に対する寄与は大きい。もし島尾敏雄がいなければ、「奄美」はいま以上に「沈黙」のベールをまとい続けていただろう。

### 3. 奄美への寄与

島尾は地元紙で、「奄美群島は文学的表現を試みる者にとつて」「最も適切な宝箱だ」として、奄美発の小説に丁寧な書評を行い、「群島地帯の文学的表現を期待に満ちたものとして見ている」（奄美群島を果して文学的に表現し得るか？）と、エールを送つている。その後も折に触れて書評を書き、去つた人へは追悼を寄せた。その視野が本格的だったのは、「琉球弧初の芥川賞受賞作品への言及のなかで、「琉球弧を表現した近代の文学的成果において、私たちは詩の山之口鏡を持つだけではないのか」（大城立裕氏の芥川受賞の事）という指摘や、「奄美に生きる日本の古代文化」についての、「金久正の著書ほど奄美の文化の根を正確につかみだしたのを見つけることはできません」（金久正の事）という評価が正鵠を射ていることにも示されている。

しかし、大きな作家だということを知らない島人にとつては、島尾敏雄は何より、図書館の館長さんだったのでないだろうか。そしてこの館長さんはアクトイブだった。

彼が初代館長になつた「県立図書館奄美分館」は、名瀬の島人に図書を提供するだけではなく、二百キロの距離に散らばる島々に向けて「巡回貸出」を行

秘めた島々）と捉えてみせたことだ。「事大主義」は伊波普猷をはじめ、沖縄の知識人が指摘してきたことだが、そこには二重性のあることを島尾は見出してゐる。彼はそれを「アマミ・コンプレックス」と名づけた。

「島びとの鹿児島人に対するコンプレックスは単純ではない」（加計呂麻島）。たとえば、奄美の島々では西郷隆盛が敬愛されていると言われるが、島尾はそこにも「救い難いコンプレックス」（名瀬の正月）があるのを見逃していない。

反発を呼び起こさずにはすまない形でしか敬愛も発露されないといい、このことだ。事大主義の側面では、「ヤマトもしくは日本の中にとけこみたいという姿勢の強かつたことは否むことができず、むしろそれはヤマトからの蔑視ないしは無視となつて返つてきた」（琉球弧に住んで十六年）。それは身近なところでも反復されて、「奄美と沖縄のあいだでさえも、沖縄の人は奄美の人を、「鹿児島ンチュウらをして好かん。シマンチュウのくせして」と言いますし、奄美の人は又南を順繰りにばかりにして、「沖縄は野蛮だ。奄美は琉球じゃない」と言います」（琉球弧の感受）、という状況を生むことになる。

島尾が「琉球弧」という用語を編み出したのには、「琉球」という言葉が受け入れられないということも踏まえてのことだった。しかし島尾はそのことを、実は「ふしぎな状況」（沖縄らしき）と見ていた。なぜなら奄美には「琉球弧的体質がある」（琉球弧から）のだから。

奄美がこれまで持つていた意識下の親近感を、もつと意識的な理解に深めなければならぬ。沖縄復帰の反動としての奄美陥没の恐れは、沖縄を知らないことから生ずる面も少なくない。（沖縄をもつと知る必要）

その通りだ。島尾の洞察をもとにすれば、「事大主義」の裏側には「権威の否定」が張り付いていた。それを手がかりにすれば、「権威の否定」をもつと踏み抜いて、自分たちの島々を等身大で肯定的に受け入れるという脱出口すら見えなくなる。

そのうえ島尾はこの二重性を、「爆発的な気性の激しきとともに、その一般的ななあふれるばかりのやさしさは他地方では珍しいこと」（南島について思うこと）と資質に近いところで捉えることも忘れていなかつた。わたしたちは島尾の奄美（琉球弧）洞察を、島人の自己理解への助けとして受け取ることが出来るのだ。こうした奄美や琉球弧に対して向けられた言葉には、かばつてくれたこと以上に糧となるものが宿つていると思える。



ところで、奄美大島に移住して十一年経った一九六七年、島尾は琉球弧について「総合的な報告」(「奄美を手がかりにした気ままな想念」)を書きたいという思いを抱く。しかし、「その心づもりで島々に向かうと、島は私の手のとどかないところに逃げ去ってしまう」(「私の中の琉球弧」という実感に囚われてしまう。それはその後も身を離れず、離れないどころか強まり、「何も書きたくない」(「島尾敏雄非小説集成」第一巻)と「ころまで落ち込み、ついに島を離れ、「遠くから見直した揚げ句に最後に残るものを持ち受ける姿勢」(「奄美の文化」編纂経緯)に移っていくことになった。

しかし、わたしたちは「報告」はなかったのではなく、果たされたと受け止めることはできると思える。この構想が生まれる五年前、一九六二年に行った講演録「私の見た奄美」がそれだ。

これは島尾がまだ沖繩に行っていない段階で行われたものであり、その意味では「総合的」とは言えないからと島尾は不服だろう。けれど、前に見たように、そこには現在でも組み尽くしていない野太い歴史観が展開されているし、それを支える「琉球弧」と「ヤポネシア」という生まれたばかりのコンセプトのびやい力を発揮している。この講演録は、短い南島エッセイのなかにあつて、最も長い文章のひとつだ。もちろん長いからいいというのではなく、伝えるべきことを伝えた豊かさも語りの熱もある。これで充分ではないかと思えるのだ。

わたしたちはそれを欠いていると思う必要はない。島尾の琉球弧報告は、「私の見た奄美」に披歴されているのだ。付け加えれば、奄美、いや琉球弧をかばう点からは「中学卒業生への或る感想」がいい。これは中学や高校を卒業したら生まれ島をひとたびは出ざるを得ない島人にとって、いまでも大きな励みになる文章だ。

#### 4. 挫折の背景

琉球弧の「総合的な報告」を思い立って以降、島尾はほぼ同じ言い方で繰り返し、「奄美についてなにかを書く」と、奄美の実体は私の手を逃がれ遠くの方に去って行き、手のとどかぬところのものになってしまう」(「奄美・沖繩の個性の発掘」)と書いている。

移住する直前には、「ぼくは沖繩に生れなかったことを後悔しているとい

山のいただきにすえつけられた拡声器からは、「朝な夕な、ときには夜ふけてからも、拡大されたふしぎなんげんの声がそこらとびでできて、私の頭の中の上になりにそそぐ」(「不思議な聴取計画」)のだった。島尾は耐えがたく思い、島人の賛同を得て「拡声器撤去の嘆願書」(「名瀬だより4島の町の現実」)まで作成して警察署に届けるが「きめ手はなかった」。やがて電灯がつき、島尾はテレビをおそれ便利におびえ、明日におびえた。

「島が本土と地つづきになる欲望に燃えたって」(「明日のおびえーわが政治的直言」)、名瀬は「破壊と建設の交錯した騒々しい建設現場のような殺伐な風景」(「九年目の島の春」と化していく。そしてついに「島のことわからなくなった」(「奄美の島から」)と思わざるを得なくなる。「海に向こうの欠落した日本の方から錆が流れつき、いつのまにか島々にべったり付着してしまっていた」(「同前」と書いた一九七一年には、すでに奄美を離れる心の準備はできていたということだ。

島の共同体が旅人を排除するだけではなかった。島の全体も、島尾が心惹かれ、つかみたいと思う野生を削ぐように進んでいったのだ。

もつと島尾の生に肉迫していえば、「妻をとおして南島をのぞく」(「沖繩・先島の旅」)方法も採っていたのだから、半身に巨大な野生を抱えた妻のミホを通じて、島の野生を捉えることもできたのかもしれないが、島尾はそうはしなかったように見える。

風もいけなかった。奄美大島の冬は、気温はさほどでもないのに北風は肌に冷たく、島尾の望む「常夏」を感じさせてくれなかった。

しかし、「私は奄美のかたち(風土や人々の風貌と気質)を通してしか、もの感受を生き生きとはたらかせることができなくなりました」(「奄美を手がかりにした気ままな想念」と、まっとうに島に当てられているものの、そこから「総合的な報告」に至らなかったのは、それこそ「風土や人々の風貌と気質」しか手がかりがなかったことにも依るのかもしれない。

それというのも、沖繩に旅した島尾は、「憂鬱な旅人」ではなく生き生きし出すことが多いのだ。少なくとも、奄美大島のことを書くときはちがう表情を見せるようになる。そこには望むような暖かな空気があった。それだけではなく、「風土や人々の風貌と気質」から生まれたかたちがあった。名瀬でもしばしば楽しんだ「沖繩芝居」があり、「女踊り」があり「城址」があった。島尾が沖繩で見出したのは、琉球弧を「解きあかす」(「風の怯えと那覇への逃れ」)ための、人間がつくった文物という媒介だった。

てもいい」(「沖繩」の意味するもの)と吐露し、「いま島々は、しきりに私を呼び、私はふたたびその島々に、渡つていこうとしている」(「加計呂麻島」と書いた島尾だった。この初発の心は、南の島へ移住する人が口にするごとと変わりなかった。けれど島の内側へ入り込み、島人の目を持つとすると、島人は旅人の彼を排除してしまう。

「私はそれをどんなにか自分の手でつかみとつてみたい、と思ったことだろう」(「初発のものへの羨望」)。けれどその願いは適えられない。

たとえば島のなかの、どこかの部落にはいつて行くと、その入り口に近づいたとたん、そのときまで空間いつぱいに触手をのびしひろげ、呼吸していた島の生活の放散が、つと急速に収縮してかたい一個の珊瑚石灰岩と化してしまう。どうしても開花のただなかに身を沈めて、その揺れをもにすることができない。私とその部落を立ち去ると、私の背後で音もなくそれはその固縛をほどく。(「離れに暮らして」)

要するに、まっとうに島に当てられたのだ。

島尾は島の野生に惹かれていた。それを象徴するのは「はだし」だ。

(前略) つい目の前を女が二人はだして歩いて行く。骨ばつた色のくろい足だ。若い方が古くなったスカートを右手でたくしあげるようにしていたので、ひざのところが見えかくれた。オーバーもレインコートもつけず、傘もささず、雨にぬれたまま、別に急ぐでもなく、色目の悪いかかとで、ぬかした道を交互にふみつけていた。その冷えこみを私は自分のあしうらに感じた。或る感動が身内を走り、泥によくれた女たちの素足から目をはずすことができない。(「島の中と外」)

はだして歩き雨に濡れるのもお構いなし。島尾は目を奪われるが、しかしそれはもう「町の中では見かけることが少なくなった」(「同前」)光景でもあった。近代化だ。

奄美の名瀬に移り住んだ直後に、島尾は「市内バスの少女の車掌が裸足のままで乗っているような風情は(地元の新聞はそのことをみつともないと揶揄したが)もう見たくても見られなくなった」(「名瀬の正月」)とも書いていた。

そして野生の象徴が「はだし」なら、近代化の象徴は「拡声器」だった。小

本土に移住してさらに風が堪えるようになった島尾は、那覇での「越冬」を思いつく。この思いつきはすぐに実行に移されて、しばしば冬を那覇で過ごすことになる。こうして書かれることになる一九七八年の「那覇からの便り」は、奄美大島に移住して数年後の一九五七年から連載した「名瀬だより」が深刻な面持ちで書かれているのに対して、島尾にしては軽やかで躍る心が感じられるものだった。

島尾は那覇の町筋のラビリンスに喜んで紛れ込んでいった。それはあたかも、いつの間にか「あの世」へ入り込んで楽しみふけるおとぎ話の主人公のようだった。

#### 5. 逆向きの生

奄美大島に移住する直前に書いたのが「加計呂麻島(一九五五年)」という文章だった島尾は、符合させるように、奄美大島での最後の文章を「加計呂麻島呑之浦」(一九七五年)と題する。

島尾はそこで、「私は加計呂麻島にこそ住むべきであったかもしれない」と書いている。これはある意味でその通りだった。たどり着くのには時間がかかるという意味では、加計呂麻島は今でも離島らしさを失っておらず、野生の衰退と近代化の波は、北琉球弧最大の都市である名瀬に比べたらはるかにゆるやかにやってくるから。しかしそれと同じ理由で、加計呂麻島では、島により強く当てられて疎外感もいつそう強まるのだとしたら、旅人の視線を立ち上げられなくなるのは同じだったかもしれない。それに、生はおいそれと選べるようにはできていない。

島に当てられることについて、島尾はこんな風に説明したことがあった。

島人は、「島の外から来た人をものごく大事にする」(「回帰の想念・ヤポネシア」)から、「竜宮に行つて来たような感じ」(「同前」)を本土の人は持つ。これは日本の型でもあるが、島ではそれが非常に強い。けれど、その気になつて再訪してみると、「そつぽを向かれてしまった」ということもありうる。島には「島の外から来る者を受け入れないところも同時にある」。「まれ人を歓迎することは嘘じやないんだけど、その後も長くずっと引き続いて、とういうわけにはいかない」のだ。

これはそのまま島尾の体験でもあった。島尾は、敗戦に至る十か月余りを加計呂麻島で、奄美復帰の直後からの二十年近くを名瀬で過ごしたが、加計呂麻



は「竜宮」であり、名瀬に再訪するものの、そこは「竜宮」を閉じた島になっていた。島尾自身、「ずっと短かった加計呂麻での体験の方がむしろ底深く圧倒的である」（「加計呂麻島呑之浦」）としているくらいだ。

島尾は「古事記」一冊を持って加計呂麻島を訪れた。すると、島は「古事記」さながらに「太古の霧にとざされていふう」（「名瀬だより10民間信仰」）だった。「歴史の透明な場所」にやってきた島尾には、「身近の時代を素通りしてスサノオやヤマトタケルと同じ感情で自分のあいだ生活することが可能なよろこびがあった」（同前）。

しかも島尾は特攻隊の隊長なのだから、「まれ人」のなかのまれびととして、半身に野生を残した加計呂麻の島人から大いに歓迎されただろうことは想像に難くない。なかでも、島尾に応えたのは、巨大な野生の感性を抱えながら、万葉集を踏まえて歌を詠むこともできる、ちよつと当時の島では考えられない知識を持ったミホだった。スサノオ気分を満たしてくれるミホと、自分の知識と感性をぶつけても応答する力量を持った敏雄のふたりが出会ったのである。これだけの条件でも、ふたりの恋愛が神話的なベールをまとわせることになるのは想像するまでもない。まるで用意された舞台のようではないか。

しかし神話の英雄気取りは、突然訪れる敗戦で断絶し、後にはどこまでも続く日常が待っていた。そして結婚した二人は、よく知られているような過酷な生活を送ることになる。その最大の犠牲者は彼らの子供たちだったろう。そこからみれば、島尾のスサノオ気取りはいい気なものだったと言えづらい。

けれども忘れるべきではない。島尾隊は、八月十三日にボンコツな魚雷艇震洋で敵艦に体当たりする出撃命令を受ける。そのうえに、発進の号令のない待機状態のまま、八月十五日を迎えたのだ。

このことは現在のわたしたちにはとても想像しにくい。だが、死ぬことをうべなつた島で「死の出撃」を待ったまま、ふいに中止になったのである。臨死体験というでもない。死の直前まで強いられて歩んだ人が、こんどは生の方へと歩みを進めなくてはならなかったのだ。それは死に向かって生きるふつうの生とは異なり、いわば逆向きに生に戻らなければならない困難を伴うのではないだろうか。まるで死後のような生を、生きた人として歩かなければならないとでもいうような。

「自分には不幸が訪れてこないから、とても小説など書ける環境にはない」（「琉球弧から」）と思っていた島尾は、特攻隊という「奇妙なそういう場に置かれ、ことにも気づいていた。島尾は昭和のはじめまで、「らい者だけが集団をなし、部落から遠くはなれ村人が誰もこないような一般にヒジャといわれる海辺の場所」で、ユナギの下にあばらやをつくり、一種の共同生活をしてきた事実がある（同前）と指摘している。その暗さを最も象徴しているのは島尾が注で紹介している挿話だ。

「肌の美しい女」がいた。女は大和人の行商人と一緒にになり、四人の男の子を生む。しかし自分が癪になったのを知って、集落から離れたヒジャに移り親子六人の孤立した生活を送る。そのうえ、大和人の夫はヒジャの掘立小屋で死んでしまう。女は、小屋の周囲で芋と野菜をつくる他、ひとり物乞いをして子供たちを育て、上の二人をやつと就職させるころまでこぎつけた。けれどある夜、女は末の子の首に縄をつけて殺してしまう。三男が逃げた先の親戚の知らせで女は駐在に呼ばれ、「やぶれ衣のまま庭先にじかに坐って調書をとられた」。泣く泣く調書に答え、いったん帰宅を許された夜、女は「小屋の横のユナギに首をくくつて死んだ」。

悲惨で痛ましい出来事と言うしかない。ヒジャは海辺でも砂浜ではなく、岩場の多いところに付けられた地名であり、ユナギ（オオハマボウ）の葉は島ではトイレットペーパーだったのだから、女が首をくくつたのは厠の横だったことになる。そういう絵を加えれば悲惨さはさらに増すだろう。

それでも、この挿話がそれだけに取まらないのは、琉球弧の神話的な思考ではユナギは世のはじめからあった聖なる植物であり、海辺も人がそこから生まれると考えられた聖なる場だからである。ヒジャのユナギの下から人間が出てきたという創生神話があつても不思議ではないのだ。この挿話はそういう神話的な装いを帯びるところがある。これは民話や伝承ではなく、郷土研究会を立ち上げ運営しながら、寄稿することもなく世話役に徹した島尾が記録した数少ないエピソードのだが、島尾は知らず知らずのうちに彼がかみたいと思つていることに近づいていた。

話を戻そう。

本土と琉球弧の差異を的確に指示した島尾だが、ひるがえつて琉球弧を均質に見ていたのではなかった。「おおかまにいつて南に行くに従つて琉球度（仮にそのようなものを想定して）が濃くなると思えていいが」「むしろ奄美にその濃い部分があるのも確かめることができた」（「奄美・沖繩・本土」と、はじめての沖繩の旅のすぐ後には島々の差異にも気づいていた）。

わたしは奄美には「風土や人々の風貌と氣質」以外に、人間の作つた文物の

そして生きて帰つて来た」体験は「小説に書ける」と、そう思う。しかし、この「不幸」は島尾が思う以上に「不幸」なのではないだろうか。そうだとしたら、この「逆向きの生」の持つ「不幸」を島尾がもう少し自覚していれば、家族を巻き込んだ、近代作家の倒錯的な「不幸」探しを避けることもできたのではないかという思いが過ぎる。生は思う通り選べるようにはできていないにしても、そこにひとつの可能性を見ておきたい気がする。

ただ、自覚するかどうかはともかく、この「不幸」は島尾の心に食い込んでいた。島尾の「総合的な報告」が挫折するのは、閉じた「竜宮」に突き当たったことに起因しているが、そこでの停滞と沈潜には、島尾が抱えた生の困難が鈍く脈打つていたのではないだろうか。

## 6. 日常の発想さえちがう

島尾敏雄の琉球弧はどこまでたどり着いていたのか。「総合的な報告」に挫折した島尾に代わつて、わたしたちはそれを探つてみよう。

島尾は「ただ通りすがりにまなざしをかわし合っただけの人々でさえ、どうしてみんなあのように人なつこく、あるやさしさをたたえることができたのか」（「沖繩・先島の旅」というところに「南島理解の鍵」（同前）を見出す人だった。そこには本土の人の「表情に乏しい硬さ」（多くの可能性秘めた島々）、「こわばりついた仮面」（名瀬だより1名瀬の町、その最初の印象と町のすがたのあらまし）がない。と、ここまでは今でも本土の人が無意識に惹かれることと同じだと言えるかもしれない。

しかし、それを「武士」が育たなかったことと関連づけたのは島尾の着眼だった。その視線は女性にも向けられて、彼は本土風の「しな」を見ることができないことに気づいている。「琉球弧では和服を狩猟民が着物をもとうように闊達に着ている」（「私の中の琉球弧」という指摘にいたっては、これは島人でも言われなければ分からない洞察だった）。

島尾の気づきは多岐に渡っている。墓には「本土のそれのようなじめじめした暗さがあり感じられない」（「奄美の墓のかたち」）。「五代ほど前の先祖たちでさえなお昨日の人のような具体性を備えているかのよう」（「名瀬だより2その気候」）に語られる。生者と交わらないのだ。また、薩摩藩時代に「隸属的な身分」である「ヤンチュ」が生み出されたとしても、「本土におけるような差別的ないわゆる「墮落」を見つけないことはできない」（「名瀬だより7災厄―台風とハブと糞と）

手がかりがないことも、島尾の「総合的な報告」を挫折に追い込んだ一因と見なしたが、島尾が奄美に何も見出せなかったわけではなかった。島尾は奄美大島の島人の「芸術的な表現の造型や記録に対するすさまじいほどの「恬淡さ」に驚いている。しかしそれを欠如として見るだけではなく、「奄美のこのころでありからだ」（「大島のふしぎ」）として「しまうた」を見出している。ただ、あれだけの「しまうた」がありながら「文学的表現が成立しないのは不思議」（「文字果つるところ」というように、残念がつてもいる。ここで島尾は、芸術的な表現や記録の欠如に嘆くだけではなく、しまうたや「大島紬の製作工程」（「大島のふしぎ」）への着眼の向こうに、文字を持たない思考を「有」あるいは「過剰」として見出せばよかつたのだ。

ただし、島尾はそこにも気づかないわけではなかった。まだ「琉球弧」という概念を編み出す前に、彼は「アマミの生活の基本的なさびしさは一個の廃墟（中略）を持たないことのような気がする」と直感する。ここでいう「廃墟」とは、人間が作つた文物のことであり、島尾の言い方ではそれは「人間くさい造形物」（「奄美―日本の南島」とも言えた）。

（前略）アマミの島々を構成する地質が微小動物の殻や珊瑚虫の骨格の集合であり、島ぐるみ巨大な構造物の廃墟だとすれば、アマミは一個の廃墟ももたないと断言したことは取り消さなければなるまい。むしろ巨大な廃墟の中で、現になお現実の生活を展開しているアマミの人々の生活というものは、その言い知れぬ魅力をそのへんの事情に根ざしているのかもしれない。（「悲しき南島地帯」）

何もないわけではないという点については、その後の考古学的成果を知らないうちという時代的な制約はある。また、こういう島尾が、老女の手にはまだ見ることができたであろう刺青に目を留めなかったのは不思議に思える。しかしここで島人の生活が巨大なサンゴの上に営まれていることに着目したころは、明らかに「琉球弧の姿を明らかにする」ことへ手をかけていた。

そのうち、島尾は沖繩への旅で得たものを手がかりにしながら、「沖繩の土地がらが持つ、亜熱帯と隆起珊瑚礁地帯の性格が、人々の発想や挙措にまでしみこんでいて、そのところは必ずしも本土の昔に重なるわけではない」（「沖繩紀行」ところまで洞察を深めていった。そしてそれは、奄美大島を離れて三年後、一九七八年に語つた「日常の発想さえ本土の人とはちがうんじゃないか」（琉球



弧の感受」という言葉に結実している。

## 7. サンゴ礁地帯

日常の発想すら違うという洞察は、「ヤポネシアの視点」からまっすぐにやってきたものだ。

結局のところ、被害、加害の視点でつかまえられるのではなく、まず必要なことは琉球弧の本来のすがたを、ヤマトの追いかぶさりの目を排除しつつ明らかに立てることである。もちろん大根のところでは立っているのだけれど、それを表現としてはつきりあらわすとのように思う。（「琉球弧に住んで十六年」）

もともとヤポネシアの発想は、日本列島を「花ざかりの島々」と見る島尾が、太平洋に視線をずらしたときに、そこにも似た島々のあることを見出したところからやってきている。島尾は話している。「南洋の土人」という考え方が出てきがちだがそれは正確ではない。そうではなく、「南太平洋の島々の生活には、それらの島々に適した生活がおこなわれているのであって、そういう意味において、ポリネシア、インドネシア、ヤポネシア、メラネシア、ミクロネシアなどの同じような生活をする島嶼群があるのだと考えたらどうか」（私の見た奄美）、と。近代化に血眼になっていた島人はこう言われて、内心反発しただろう。しかし、これは島人が考えている以上の深度から島を掬いあげる言葉だった。この視線ずらしが左を向いていたのを右にしてみたという思いつきに留まらないのは、「日本文化の素性を考える時に、あまりに大陸のことを意識しすぎている」（同前）内省を伴うからだ。その証拠に、わたしたちは今でも島尾の指摘にはつとせられるのではないだろうか。

興味深いことに島尾は、「ヤポネシア」という概念を初めて公表した直後に、奄美大島について、「実は大陸からうつしかぶせられたうろこの最も少ない場所ではなからうかという考えがはつきりしてきたときに、私をしばりつけてはなさぬ意思を、この島の中に感じた」（「ふるさとを語る」と書いている。ただ、視線をずらしてみただけではない。そこには、大陸の影響が薄いのではないかという考えが伴っていた。

これは、中国の影響が造形物にも見られる沖縄ではないから言えたのではないから。しかし、彼は奄美大島を例外としては見てない。

（前略）私の住んでいる島がたとえ本土に似たけわしい山々が重なりあつていようと、私の胸中に拡がり納まっている島のイメージは、快いたるみでふくらんだ低い丘の外には目をささぎるものがない、波がそこどころで白く裏返る裾礁を持った珊瑚礁の島だ。（島の中と外）

島尾の目に琉球弧はサンゴ礁の島々として映った。そのときの島は、「せまい小さな孤島ではなくて、なにかいいあらわすことのできない広さとして」（「与論島のモチーフ」）捉えられることになった。月夜の与論島で、島尾は「浜辺の砂丘と海原との区別を失い、どこまでも目のささぎるものがない、大地のつらなりをなかにいるような錯覚からぬけだせなかつた」（「季節通信」）。サンゴ礁を媒介にして陸地としての島の境界は溶けるのだ。

実際、島の境界はサンゴ礁を区切りにして表すのがいい。そうしてみれば、たとえば宮古群島は、宮古島、池間島、伊良部島、来間島、そして広くみれば大神島までがひとかたまりの島として見えてくるだろう。八重山にしても、石垣島と西表島という大きな島のあいだに小さな島があるのではなく、石垣と西表を両極にしたひとかたまりの島として浮かび上がってくる。島の世界はそう捉えると、よく見えてくることがあるのだ。

しかし、沖縄や先島を旅した後には、与論島で捉えた「広さ」はもつと拡張されることになった。

島のかたちの小ささは押さえたつもりでいても、感覚的には海と空との境界の不分明な広がりや沖繩は持つていて、ひとつの限られた場所に追いつめることのできない広い世界につながっているところがある。（「琉球弧の吸引力的魅力」）

サンゴ礁の島とは、サンゴ礁を通じて海と空ともつながり、溶けあつた世界なのだ。

日常の発想さえちがうと言ふとき、その基盤にサンゴ礁がある。わたしはここで島尾の言葉を引き取る。するとそれは語り出す。幻想の足場はサンゴ礁にある。島人よ、そこに立て。そこから立ち上るものによって言葉を生み出し、語りを編み直せ、と。

いかと思われるかもしれない。しかし、島尾は戦中の加計呂麻島で、古老が「中国との合併」を「親もにもどるような具合に情愛をこめて」（名瀬だより10民間信仰）話すのを聞いている。中国との関わりがあつたのを知らないわけではない。けれどもおそらく島尾は、「仏教も儒教もこの島を覆うことはできなかった」（名瀬だより1名瀬の町、その最初の印象と町のすがたのあらし）という、より古層へと目を向けていたのだ。

太平洋の島々の延長に日本列島を見出したヤポネシアの発想は、大陸からの影響が少ないと考えられた琉球弧の存在に促されている。しかしここまでくると、このことの他にもうひとつ、ヤポネシアの発想を促したものがあつて見えてくる。

それは、琉球弧が「珊瑚礁地帯」（同前）であることだ。つまり、島尾がヤポネシアを発想したのは、日本列島も太平洋の島々として見ることができるといふ地理的な位置のことばかりではなかつたというとき、大陸の影響度が低いということの他に、琉球弧がサンゴ礁地帯であることが、もうひとつの媒介になって、日本列島を太平洋の島々に連ねてみる視点は獲得されたのだ。この、「本土をはみ出す」（「ふるさとを語る」）琉球弧の要素を艇に、島尾は琉球弧の北に延びる島々を含めて、日本列島を太平洋の島々につなげているのである。

島尾はここで、「珊瑚礁地帯」であることより、大陸からの影響が少なかつたことを、島が「私をしばりつけてはなさぬ意思」として力点を置いているが、島尾敏雄が解き明かした琉球弧を追うには、「珊瑚礁地帯」として見ていたことの方へ目を向けてみなければならぬ。

振り返ってみれば、旅人が入り込もうとすると閉じてしまう「部落」のことを、島尾は「一個の珊瑚石灰岩」にたとえていた。また、奄美大島には「廃墟」が何もないと嘆くのを思い留まるように、地表を覆うサンゴ岩を「巨大な廃墟」として見てもいた。島尾の琉球弧には、いつもこのサンゴ礁の島という視線が伏流していたのだ。

島尾は「琉球弧」と「ヤポネシア」の概念を打ち出す前に、すでにこう書いていた。

奄美大島に移り住んで四年ほどが経つたとき、島尾はすでに捉えるべきものを正確に見据えていたのだ。実はこれを奄美大島で洞察するのは難しいはずだった。なぜなら、琉球弧は、北へいくほどサンゴ礁の島らしい景観は希薄にな

## 8. サンゴ礁の子

奄美大島を離れ、本土の冬の風に堪えた島尾が、「越冬」中の那覇で魅入られたのは、「女踊り」の身のこなしと、座喜味城址のたたずまい」（「那覇からの便り」）だった。

島尾は、親しんだ「沖繩芝居」のなかで「琉球舞踊」に惹かれ、そのなかでも「女踊り」にひととき強い印象を受けるのだが、文章に尽くすところまでは至らなかつたようだった。ただ、「単純化された様式の美しさには、沖繩の人々の心の一面を表し得たあやしい到達」（同前）を感じずにはいらなかつたし、「同じものが演じられ方によっていろいろのかたちに見えてきて厭きない」のだった。わたしたちは、島尾がここで感じていたことを正確に写し取ることはできないが、たとえばそれは、蝶が蛹から羽化するところを何度見ても飽きないのに似ているのかもしれない。

奄美大島では「芸術的な表現の造型や記録に対するすさまじいほどの」さに驚き、文学的な表現がないことを嘆いてもいた島尾だった。しかここでは「文学をなお「うたい」「おどる」はたらしの魅惑の腕の中から解き放そうとはしないふしぎの力をまだ失うことはないように思える」（「那覇からの便り」）と、少なくとも、「芸能」こそが琉球弧の表現であると納得するに至つたのは確かだった。

島尾は「女踊り」に比べて「座喜味城址」については饒舌だ。「珊瑚石灰岩」の（アーチ型の門）を入ると「不思議な空間」が待っている。

そこに足を踏み入れた者に訪れる永遠の感覚のようなものの、時の流れがふと立ち消えてしまったような体験は、或いは南島の時空の根のようなものの表現なのかもしれない。そこでは広ささえ確かさを失い、わずかに今ぐぐりはいつたばかりの拱門と次なる上の広場に抜け出るための拱門が対応を示しつつ、その外側に世間の時が流れているという思いに襲われることから免れない。その空間のぐるりを取り巻く城壁のかたちのおおらかなすがた。均整のとれた直線と左右対称などというせせこましさを飛翔して、童画さながらに奔放に伸び、曲りくねって一つの空間を圍繞している自由さは、この世のものと思えないほどだ。（「那覇日記」）

わたしは思わず、ここに描かれているものについて口をはさみたくなるが、その前に、島尾はもう少し「座喜味城址」について書いている。城址の頂の「地勢に逆らわずに伸びている」格好が、「蛇の気ままな蛇行のすがた」のようでもあり、かと思うと「時にユーモラスな破調をも示す余裕」もある。彼はそこに「言うに言えぬ自由で快い韻律」を感じる。しかも、島尾それを「女踊り」の「接近と断念」という主題の濃密な繰り返し（「那覇からの便り」と「根は同じ」だと見なしている）。

「女踊り」ばかりではない。「沖縄芝居」にも「歌謡」にも「沖縄の人々の発想や挙措」にも、「根が一つ」と感じさせるものがある。「攻防の構えを欠落させた部類の城」（「那覇からの便り」）である座喜味城と、沖縄の芸能の「生真面目な追求の中に、いきなり破調を突出させる」型には「同質の感動」があると、島尾は言う。

島尾はこの「沖縄の韻律」について、「とても解き明かす力は無いが」と断りつつ、「予感」として「沖縄がいわば「小国寡民」の経験を深くかさねてきたからではないだろうか」（「那覇に仮寓して」）と書いている。島尾は、ここで王朝の記憶に引きずられているところはあるが、「小国寡民」の言葉遣いに躰かなければ、核心を捉えているのではないだろうか。

島尾が芸能にも城址にも感じた韻律を、「根が一つ」のものとして捉えるには、その根底にまで降りてゆかなければならない。そうして思い当たるのは、曲線と破調の繰り返しというリズムには、「世替わり」によっても絶えず、時間が一方に進むことにはあらがいがい反復させようとする琉球弧の野生の思考が顔を出しているのではないということだ。

たとえば、米軍統治から日本へ復帰したことを、琉球弧では「アメリカ世」から「大和世」へという言い方をする。これが「世替わり」だ。それは転換時には違いないが、「アマン世」、「クバの葉世」などと呼ばれる狩猟採集の時代までさかのぼれば、「世替わり」は、神話を更新せざるをえなくなるほど世界の構成が変わってしまったときを指していた。それはまさに、島尾が言うように「破調」と呼ぶべき事態だ。

また、これを時間に対する捉え方からみれば、今日のように明日もあるという繰り返しを感じ方が強かったのが、一方に進むという感覚が力を増しているのが「世替わり」だった。そして現在では、それがふつうの時間感覚になっている。

ところが、それにもかかわらず、時間を繰り返しであり反復であるように捉

えようとする志向性を、祭儀のなかに残してきたのが琉球弧だった（喜山荘「珊瑚礁の思考」）。

反復する時間を島尾は、「座喜味城址」のこととして、「永遠の感覚」、「時の流れがふと立ち消えてしまったような体験」と書いていた。そして、その空間の醸す空気を、「この世のものとは思えないほどだ」と言い表していた。これは島尾が、永遠の現在とも言うべき反復する時間性を建築のなかに見出していたことを意味している。

島尾は「座喜味城址」に感じるものを、那覇のコンクリートの家にも、那覇の町にも感じた。そして那覇の「ラビリンズ」については、その成り立ちを推し測っている。

即ち平らな土地がはじめから展開していたのではなく、海水に囲まれた幾つかの島や岩礁が、その固有のかたちを残したまま継ぎはぎされて、今の市街地をかたちづくったと思えるからである。（「安里川廻行」）

島尾は解き明かさなくても、いや解き明かしていることに気づいていないだけのところまで歩みを進めていた。島尾は、韻律に「世替わり」という破調と、反復する時間を失わない身体性を感じ、そして空間にはサンゴ礁を見ていたのだ。

ところでわたしが思わず口をはさみたくなったのは、島尾の「座喜味城址」の記述が、まるで童宮城を描いているように見えることだった。こうして島尾の感受を追えば、それはその通りだと言えるのではないだろうか。琉球弧はサンゴ礁のもとで野生の思考を育んできた。島尾は、そうは語らない芸能や造形物のなかに、いわばサンゴ礁の思考を感じとっていたのだ。

島尾はなぜ、そうすることができたのだろうか。

それはやはり島尾が野生の心を豊かに持っていたからではないだろうか。奄美大島にいた頃、二十年あまり前にマニラで食べたパイヤが忘れられないと話すとき、妻のミホはいかにもミホらしく、それまで植えていた野菜を根こそぎにして庭をパイヤでいっぱいにしてしまう。それで毎日パイヤにありつくことができるようになるのだが、島尾はそこでこんなことを書くのだ。

それにしても、私はパイヤを見るたびに、たとえば、葉が茂って落ちてもそこに妻の手足を感じ、実が充実しても未成熟にとどまってもそこに

妻の姿を見、うまいうまいと食べる時には、なんだか妻のからだの一部を食べているような気持ちになってくるのは、これは一体どういうことだろうか。（「庭植えのパイヤ」）

ここでの島尾の心は、もうほとんどミホという母に育てられる乳幼児に退行しているが、この感じ方は、ヤムイモを主食とする太平洋の島人が、それを「祖先の肉」と呼ぶのと同じ心の位相にあると言っている。島尾はここで、ミホでありパイヤでもある「祖先」の子として、神話を立ち上げかけているのである。

しかも島尾の野生の心にはもつと興行きがあった。

島尾は島人の陽に焼けた黒い顔に、どういうわけか、「あの潮と陽にさらされて骨のようになった白いウル（樹枝状珊瑚塊のかげら）のような清潔な印象」を持ってしまふ人だった（名瀬だより9周辺の村落）。そればかりではない。彼は、「白くさらされた珊瑚虫骨片の堆積を白昼の砂浜で目にするたびに、私はどうしても人間の骨を連想しないではおれない」（「奄美の墓のかたち」）のだ。島人にはサンゴを感じ、サンゴには骨を感じる。そして骨を連想してしまうのに、「その中に融和したいふしぎなつかしい感情の起きてくるのが防げない」（「同前」）。骨を感じるそのサンゴに溶け入ろうとしているのである。

与論島で洗骨後の骨を納める瓶を見たときのことだった。

二〇一七年一月

▼喜山荘一氏のプロフィール／きやま・そういち 奄美群島・与論島生まれ。メーカー。企業の商品開発や販売促進を支援。著書に、『珊瑚礁の思考』『奄美自立論』『聞く技術』『10年商品をつくるBMR』他がある。

▼この論考は、二〇一七年一月二一日（土）に開かれる「神戸から島尾敏雄を問う 文学・思想そして奄美の位相から リレートーク in 神戸文学館」に合わせて執筆された論考です。





西田幾多郎 書「事事無礙」

今夏、台風の直撃を受けながら、ふたつの印象深い哲学者の記念館を訪れた。「西田幾多郎記念哲学館」と「鈴木大拙館」(ともに石川県)である。  
掲載の写真は哲学者・西田幾多郎(1870-1945)の書である。「事事無礙」と書かれている。伸びやかに書かれた一本の縦線が目が釘付けとなった。西田なりにこの華嚴哲学の重要な用語のひとつである「事事無礙法界」を理解した上での揮毫であると直観したのである。  
この「事事無礙法界」とは、世界においてコト(事象)とコト(事象)が、たがいに作用しあい融通しあっている真理の境地(法界)を言う。華嚴にはこの他にも「理事無礙法界」や朝鮮華嚴で究められた「理理無礙法界」といった境地があるのだが、日本の仏教ではこの「事事無礙法界」の境地が重要視される。それは、〈事〉に対する〈理〉への向かい方の差異によるだろう。〈理〉とは普遍的な理法であり、誤解しているかもしれないが〈アイデア〉のありようと通底するものがある。「理事無礙法界」とは、個別的なコト(事象)と、普遍的な理法が一体不可分

### 幾多郎と大拙の相即

であり矛盾なく調和している法界(真理の境地)であることを言う。しかし日本の仏教哲学では、たとえ「理事無礙法界」の境地にいたったとしても、最後にはやはり「事事無礙法界」の境地に戻ってゆくのだということを目指しているような気がする。というのは日本の仏教哲学にかぎらず日本人の心性として、〈事〉と〈理〉は別個に存在しているのではなく、〈事〉の中に〈理〉が内包され、〈理〉は〈事〉として顕現するのだという思想によるものだと推察する。  
鈴木大拙は『華嚴の研究』のなかで、華嚴において世界

のなかで〈事〉と〈理〉が現象界で作用しあう動因として「相即・相入・無礙」を挙げる。「相即、相入、無礙が華嚴哲学の根本的・哲学的概念だとわれわれはいふのであるが、併しこの

場合忘れてはならぬことは、この概念が個々の諸存在の實在することを決して無視してゐるものではないといふことである。」と語る。

〈事〉は実在するものであり、仮の姿ではない。また〈理〉によって生かされたものでもないだろう。現象世界における実在としての〈事〉と〈理〉が「相即・相入・無礙」しあう事態を感得することが法界(真理の境地)に達する方途なのではないだろうか。

もちろん西田幾多郎にしろ鈴木大拙にしろ禅思想からこの「事事無礙法界」を眺めていたことは記しておかなければならない。彼らの想念の中には、故郷の悠とした自然と永い雪にとざされた冬の光景がひろがり、これらが二人の思惟の根っここの部分に影響しているのだろうかと思いつつ、野分けの風雨のなかの北陸路を旅していたのであった。

<p>詩と評論 月刊「Mélange」Vol.126 神戸</p>	<p>2017年09月24日 通巻126号 増補版 発行所/月刊「Mélange」編集部 〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F 編集・発行人/大橋愛由等(「Mélange」同人) maroad66454@gmail.com 定価 600円(税別)</p>
---	--